

いのちの水

二〇一九年

一月号

六九五号

わたしたちの外なる人は滅びても、
内なる人は日ごとに新しくされていく。(Ⅱコリント4の16)

目次

- ・新しい歌を 1
- ・本当に新しくするもの 2
- ・命の言葉 5
- ・休憩室 8
- ・旧約聖書続編から 9



新しい歌を

旧約聖書の詩―詩篇や預言書の一部に含まれる詩には、しばしば「新しい歌」という言葉がみられる。

それは、作られたばかりの時間的に新しい歌ということではなく、神によつて新しくされた魂からの歌である。

この世の暗闇―悲しみや苦難の数々あるただなかにおいて、そこから救いだされるとき、あるいは、直接その困難な状況が変わらずとも、その魂が新たにされるならば、そこにそれまで見えなかった神の愛が実感され、その力が与えられるゆえに、おのずと新しい歌が生まれる。

…主は、わたしの口に新しい

歌を、わたしたちの神への賛美を授けてくださった。

多くの人は 主を仰ぎ見、主を畏れ敬い、主に依り頼む。(詩篇40の4)

そしてその経験は、自分だけでなく、さまざまの人々が共有する体験だと知らされるゆえに、このように記されている。

じつさいこの詩は三千年ほども昔に作られたものとして伝えられているが、それ以来、無数の人々によつて、新しい歌が歌われてきた。神を仰ぎ見、主をおそれ敬うこと、その主に信頼していきることが、さらに新しい歌を生み出し、世界に伝えられてきた。

…新しい歌を主に向かって歌え。

地の果てから主の榮譽を歌え。海に漕ぎ出す者、海に満ちるもの、島々とそこに住む者よ。

(イザヤ書42の10)

この聖句も、神によつて救われ、その光を受けた者は、地の果て―世界に増え広がることと言われている。二千五百年ほど昔にすでに預言されていた。

学問とか地位、この世の権力とか関わりのない漁業や船乗りたち、そしていろいろな都会的な文明から離れた島々にあつてもこの新しい歌を歌うようになることが予見されている。

そしてこの新しい歌とは、人に聞かせるためではなく、大いなる救いの業をなしてください。神に対して歌うことが言われている。

：神様、私はあなたに向かつて新しい歌をうたい、十弦の琴をもってほめ歌をうたおう。(詩篇144の9)

：ハレルヤ。新しい歌を主に向かつて歌え。主の慈しみに生きる人の集いで賛美の歌をうたえ。(詩篇149の1)

キリスト教の讚美歌は、こうした古くからの新しい歌を歌おうということの流れから生まれたものである。

この世の歌が、人間的思いから出て、人に向かつて歌われるのとは対照的に、神によつて救われたものの魂から生まれ、神に向かつて歌われるものゆえ、神から出て神に向かうというべきものである。

新しい年を迎え、私たちも数千年前から言われているこの「新しい歌」を日々歌えるように導かれていきたいと思う。

本当に新しくするもの

この世界では、常に新しいものに関心が集まる。日毎に新たな政治や社会の出来事も起り、事件、災害が生じる。それらを知らせるニュースは、関心を引く。そしてまた次の日には別の―目新しい出来事に関心が集つて、それまでのニュースはもはや関心は持たれない。

ニュースは事柄が重要でなくとも、珍しいというだけで、報道される。昔から言われるように、犬が人間を噛んだといつてもニュースにならないが、逆に人間が犬を噛んだといえ、ニュースになる―といわれたりするほどである。そうした新しさを次々に追いかけていつても、それを受けとる人間の本質は変わらない。かえって、悲劇的な事件などを詳細に知らせるニュースなど、そんなことは、当事者たちにとつては、何の励ましにも

も力にもならないでかえって関係のない人たちによけいな詮索をされることで迷惑なことにもなる。

犯罪事件など、詳細に知らせるほど、かえってそのような悪の力やそのやり方を見せつけることになり、悪しき風が見る人の心の中に吹き込むことにつながり、心の病んだ人の犯罪を誘発することもある。

友情にも、見せ掛けの、一時的な友情と、何があつても変わらない本当の友情があるし、真理と思われているものも、やはり一時的に真理と思われているだけのものと、本当の真理―永遠の真理がある。

美にも、化粧や衣服、あるいは生まれつきの美貌といった表面的な美しさと、そうしたことによらない、その人の魂からにじみ出る本当の美しさがある。

自然というものも、作られた自然と、人間の手の入っていない本当の自然がある。

愛という至るところで見られる言葉―いろいろな歌や詩歌、小説などの文学、演劇等々でも繰り返して出てくる言葉も、そのほとんどは、本当の愛の影にすぎない。

そうした愛は、どちらかの側の不信実とか事故、病気などでたちまち変質し、あるいは憎しみに変つたり消えていくからである。

このように、この世のさまざまのことは、みなみせかけのものであり、影のようなものである。「本当の」という言葉を付けねばならない。

私たち自身も、せいぜい90年もすれば、みな消えていく影のような存在である。

ここでも、「本当の私たち」というものに変えられるならば、永遠に消えることのない存在となる。

このような新しい世界を聖書が指し示している。それは、過ぎ去っていくことのない、

新しさである。

そのような新しさがあるということは、まったく私自身も知らなかったし、周囲の何人も語ったことはなかったし教えられることもなかった。

その真の新しさを知るためには、まず自分自身が、新しく生まれる必要があった。

自分が新しくなると周囲も新しく感じられるからである。

その自分が新しくなるためには、私たちが自分の本質を知ることが出発点となる。

私たちが、その魂の深いところ、真理、良きこと、美しいことから大きくそれていること―言い換えると自分の罪を知ることが不可欠となる。

それは、聖書の言葉―神の言葉によってなされる。私自身ふりかえってみても、人間の言葉―思想や意見、考え、学問等々によっては、考え方が広くなったり、より正確にいろいろなることを知るようになったりしたが、魂の本質は全く

変えられなかった。

しかし、聖書のほんのわずかの言葉に接して、私はそれまでの狭い自分中心の世界から永遠の世界、人類の根底を流れてきた壮大な真理の流れを初めて知らされた。

それは、自分の罪深い本質を知らされるとともに、そのどうすることもできない罪深さを赦してくださり、ただ、キリストが十字架にかかって私たち人間の罪を背負って死んでくださった―ということ

信じるだけで、本当の新しい世界へと招き入れられたのだ。そのことは、次の聖書の言葉に表されている。

：だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。

古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。(*) (II コリント5の17)

(*) 「キリストにある」は、新共

同訳では、「キリストと結びついて」と訳されていた。しかし、原文のギリシャ語では、「キリストの内にある」 en Christo であるから、ほとんどすべての各種外国語訳でも、そのように訳されている。英語では、in Christ ドイツ語では、in Christus、フランス語 en Christ。英訳で私が参照した、40種類ほどのなかで一つだけが、次のように、新共同訳と同じ表現「結びついて」と訳している。 united with the Messiah (The complete Jewish Bible)

それゆえ、2018年12月に出版された新共同訳の改訂版と言える聖書協会共同訳では、以前のように「キリストにある」と訳が変更されている。

このようなことから明らかのように、翻訳は、神学的な新たな知見から変えられるだけでなく、少数の翻訳担当者の考えによっても変えられるのであって、その訳だけを見るなら、どちらが正しいのかあるいはより原文に近いかがわからなくなる。そのために、原語がわからずとも、英訳なども複数参照することで、原語のニュアンスにより近づくことができる。

キリストの内にあるためにはどうすればよいのか、それはただ、キリストを私たちの罪を担って十字架で死んでくださったと、信じるだけでよい。

あるいは、福音書に記されている例で言えば、キリストは絶大な力を持つている、神と同質の御方だと信じるだけでよいのである。

それは、つぎの記述からもわかる。

中風の人を四人が運んできて、イエスのもとに連れて行くこととしたができなかった。それゆえに、屋根をはがしてその中風の人をイエスの前につり降ろした。このような非常識とも思える仕方、イエスは、人間にできない神の力を持つておられると信じるとき、イエスは、その中風の人の病を癒されたのだった。

：イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、「あなたの罪は赦された」(マルコ2の1〜5)

罪赦されるときには、私たちがキリストの内にあるための妨げはなくなるゆえに、おのずからキリストの内に置かれる。―キリストは聖なる霊であり、

どこにでも風のように吹いていく。ドアに鍵がかかっている。でもそこから入っていくことができる。(ヨハネ福音書20の19参照)

私たちがキリストを救い主、全能の神の子と信じるとき、ただそれだけで、キリストの内に置かれる。

そして、新しくされた者は、新しい視点で、さらに普通の人には秘められた目には見えない世界―霊的世界に目を開かれる。

それゆえ、殺されるという極限の状況にあつても、そこで開かれた新たな世界とそこから与えられる力と平安によって、その人の人生において最も光輝く瞬間にさえなる。

その実例が、人々の全くの誤解によって石打ちで殺されたステファノである。彼は、死ぬ間際に、天が開けて神と復活されたキリストが見えたことと記されている。

そして、そこから新たな力が与えられ、憎しみと殺意に燃

える民衆のただなかにあつて、主の平安を保ち、そこから周囲の人たちへの祈りをもって地上の命を終えたのだった。

あるいは、水野源三のように重いからだの障がいを持ち、ものをいうこともできず、寝たきりであつた人でさえも、霊的に新しくされたゆえに、つぎつぎと天の国からの清い風を受け止め、それを詩のたちで周囲に注いでいくことができたのだった。

当時は車いすも車もなく、ただ家族、親族のごく一部の人が折々に持つてきてくれる野草の花や狭い部屋からのぞまれる田舎の風景や大空といった程度しかない。

それでも、数本の野草の花とか木々の枝に咲く星々、そのきわめて限定された自然であってもそれが一つの窓となつて数多くの詩が生まれた。

神、そして復活したキリストは聖なる霊となつていて、神と同質の存在であるゆえに、キリストは、愛であり、また

無限に高く、清く、また美しい存在である。

そのキリストが私たちの内に住んでくださるときには、そのキリストが必要なことを教える。

：「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。(Ⅱコリント 4:6)

これは、聖書巻頭に記されている、闇と荒廃、空虚のただなかに、神が光あれ！言われたときに、光が存在するようになったということが、たんに遙かな昔の天地創造のときだけのことでなく、いまも生きている私たちの内に実現する真理であると言おうとしている。

神が私たちの内に、光あれ！と言われるとき、それまでもなんなに学んでも、経験してもわからなかったことがわかる

ようになる。キリストの御顔に輝く栄光とは、キリストが持つておられる完全な愛や清さ、力、真実などを意味して、そういつたものが、わかるようになるというのである。

無限のものに触れるとき、それは古びることのないものゆえ、つねに新しいものを感じる。

夜空の星は、数千年も昔から同じ輝きである。しかし、その光を見つめているときには、何か祈りに誘うもの、御国からの語りかけといったものが感じられるようになり、いくらかそれを毎日見ている見飽きるものがなく、日々新たな何かを注がれる。

私たちの日常生活のなかで、キリストの十字架を仰ぐときも同様である。罪ふかき自分を思い、そこからキリストの十字架を仰ぐときには、その十字架上からキリストが「汝の罪、赦されたり」―との静

かな細い声を聞くことができ
る。それは常に新しい感謝と
なる。

私たちの常識的な考え方では、
私たちは次第に老化し、古び
ていき、動けなくなり、生ま
れたときの初々しきとは逆に、
しばしば病気などのゆえに醜
くなつて、最終的には死んで
ただの灰、もしくは土にかえつ
てしまう。

しかし、神の約束は、そうし
た無になるようなことが人間
の最後の姿であるとはまった
く言われていない。

私たちが死ぬとき、新たな復
活が与えられ、キリストの栄
光と同じ姿に変えられる。

(フィリピ書3の21) 言い換
えると、完全な新しさが与え
られると約束されている。

さらには、その私たちが新し
くされるように、この世界、
宇宙全体も、「新しい天と地」
に変えられると記されている。

(黙示録21の1)

そしてそのような状況におい
て何があるのだろうか。
それは、つぎのような世界で
ある。

「見よ、神が人とともに住み、
彼らの目の涙をことごとくぬ
ぐい取ってください。

もはや死もなく、悲しみも嘆
きもない」 (黙示録21の6)

人間がたえず探し求める表面
的な新しさでなく、いかなる
深い悲しみや苦しみもすべて
がぬぐい取られるという新し
い世界なのである。

神は愛であり、全能ゆえに
このようなことが可能になる。

命の言葉

この世には、さまざまの言葉
がある。それはいのちの言葉
か、それともときが来たら死
んでしまう言葉であるかであ
る。

言い換えると、影のように一
時的な言葉か、もしくは、い

かなる状況にあつても命を失
うことなく、人間に力を与え、
はたらし続ける言葉であるか
である。

例えば、戦前は、大東亜共栄
圏、八紘一宇(世界を一つの
家とし、その支配者として天
皇を位置づける考え)、また
アメリカやイギリスを鬼畜米
英、侵略戦争のことを聖戦、
普通の人間である天皇を現人
神と称したこと等々。

こうした言葉は、学者、政治
家、教育家等々が、その本質
を見抜くことができず、侵略
戦争を正当化するために氾濫
させていた。しかし、このよ
うな言葉は、敗戦後は、一部
の人間以外には、通用しなく
なった。

あるいは、ソ連やアメリカの
原発の重大事故を見ても明らか
なその危険性にもかかわらず、
福島の大事故以前には、日本
の原発は絶対安全、大事故な
ど、隕石にあたるくらい確
率だなどと、原子力の専門家

の学者たちさえ主張していた。
それらが影のように消えてし
まったことは明らかである

このような、政治や社会的
な言葉と異なり、日常の雑談
という形の言葉、また、いろ
いろな知識の言葉がある。そ
れは、学びの言葉である。学
校教育では、さまざまの知識
の言葉を教えられ、さまざま
のことに對してより深く、正
しく考えるようにと導かれる。

また、それらの学びで得た言
葉(知識)を暗記して成績を
よくしようとする。
また相手を傷つける言葉もあ
れば、相手を喜ばす言葉、そ
して哲学などの論理的な言葉、
科学の法則、数学などの数式
も一種の言葉でもある。

さらには、言葉にならない言
葉もある。私たちが、誰かを
見下したり、怒り、憎しみな
どをもって相手を見つめると
き、そこには、何も言わずと
も、それが伝わる。

愛のまなざしもただそれだけ

で伝わる。言葉以上の言葉であり、目は口ほどにものを言う、といわれるほどである。

犬やネコなども―とくに野良犬や野良猫は、人間の目をじつと見つめる。それによつて相手が、敵対するののか、そうでないかを読みとろうとしている。

言葉にならない言葉―それは多くの自然が発する光景や音もそうである。星のまたたきは、言葉にならない言葉を発している。そこには、人間の言葉以上の深い天来のメッセ―ジが込められている。

自然のさまざまのたたずまい―それは万物の創造者である神のご意志を表している。「神は愛である」(*) なら、絶えずその愛のこもった言葉で、かたりかけようとしているということになる。

(*) Iヨハネ4の16

神は愛のなかの愛であるゆえ、人間の根本問題である罪―どうしても正しい道を歩けない

という罪の束縛から解放するために、言い換えると罪の赦しの喜びを与えるために、キリストを送り、十字架に付けてまでその愛を貫かれた。

しかし、神の愛は決してその罪からの救いに終わるのではない。その愛は無限であるゆえに、人間の根本問題から、到る所にひろがり、包んでい

る。神が創造され、いまでも支えられているその自然には、その愛ゆえにさまざまの神の愛のメッセ―ジが込められている。孤独に悩む者にとつて、夜空の星は、天地の創造者は、お前を愛しているのだ―という神の静かな細い声を伴っている。

静かに人知れず咲く野山の花々も、神の大きいなる御手によつて生かされ、支えられていることを伝えようとしている。

主イエスも、「野の花を見よ!」と言われた。それらは、神が守っているとされたのであり、神の愛がそれらを美しく

しているのだと言われたのである。

こうしたさまざまの自然が語りかける言葉は、学識も経験もあるいは富や権力などいっさいを要しない。ただ、全能の神、愛の神を信じて仰ぐだけで足りる。

ここに人間にとつて根本的に重要なものは、不思議なほど平等に備えられているのであるのに気づかされる。

私自身、困難な問題に直面し、苦しいとき、悲しみに沈むとき、しばしば山に入った。そしてじっさいにそこで「静かなる細き声」を聞き取り、新たに力を受けてきた。重い問題が前途に立ちふさがったとき、大きな松の木にもたれかかって、祈り続けたとき、闇のなかにも、かすかな光の一点が見えてきて、それがしっかりと私を照らしている―という実感を与えられたこともしばしばであった。

こうした自然のさまざまのところから響いてくる言葉―それはいのちを与えようとしている。

とくに夜空の星々は、いのちの言葉のメッセ―ジを送っているゆえ、二千年前のローマ帝国の迫害のもとに置かれたキリスト者たちは、早朝に礼拝に急ぐ途上で見かけた明けの明星(金星)を、再臨のキリストを指し示すものとして受けとったし、じっさい、黙示録の著者は、「私は輝く明けの明星である」という復活したキリストからの語りかけを聞いたのだった。(黙示録22の16)

また、ダンテの神曲の地獄篇、煉獄編、天国編のいずれの巻においても、イタリア語の原文ではその最後の言葉は、「Stelle」(星の複数形)という言葉で終えられている。

神曲は一万四千行を越える膨大な詩を、3行ごとに韻を踏

み、各行もリズムを整えてい
るといふ詩という観点からも
完璧なものと言われ、かつそ
の内容が、人間の罪、暗黒の
力、男女の愛情の力とその罪
と限界、権力者と宗教界の腐
敗、それに対しての預言者的
な洞察と批判、そして悔い改
め―魂の方向転換の重要性、
そしてそのようなこの世の闇
と戦いのなかから、人間の意
志の力では滅んでしまうのみ
ということを思い知らされ、
そこから「導かれる歩み」が
不可欠であることも示されて
いる。

このダンテの世界の深さ、広
さ、詩的構成の卓越性によつ
て、ドイツ語訳だけでも、百
数十種類もあるという。(日
本語訳は、6〜7種類)

翻訳には、大変なエネルギー
と学識を要するが、神曲にお
いては、とくに、それ以前の
ローマの大詩人ヴェルギリウ
スの文学、哲学、社会、天文、
キリスト教のとくに傑出した
人々のこと、ローマ帝国の歴
史、当時のカトリック教会の
腐敗等々の深い素養がなけれ
ば翻訳や注解はできない。

それにもかかわらず、これほ
どまでに多くの文学者を引き
つけて翻訳という多大の労力
を要する仕事に向かわせたの
には、驚かされる。

して導こうとしておられるの
を、彼自身の現実の体験から
も深く啓示を受けたからであ
る。

そして、地獄のようなこの世
のくらしい現実にあつても、そ
こを神の導きによつて歩むと
きには、必ず行く手には、永
遠の星―真理の光が見えてき
たのであるし、その星々から
のメッセージ(言葉)をダン
テも深く聞き取ったゆえにこ
のように、重要な詩の各篇の
最後に「星」という言葉を置
いたのだと考えられる。

現代の私たちにおいても、神
によつて清められる歩みの到
達点にもまた、聖なる星の輝
き―神の光がいつそう鮮やか
に見えてくるのであろう。

には、行く手には必ず清めが
まつとうされた象徴としての
星が見えてくる。

このように、人間の目に見え
る自然のうち、最も永遠的で
しかも光に満ちている星が語
る言葉を聞き取ったゆえに、
ダンテはこのように神曲で重
要な位置づけをしたのだと考
えられる。

このようなきさまの言葉が
私たちの世界にはある。そう
したもの根源にあるいのち
の言葉とは、何か。

キリストの12弟子たちは、捕
らわれて牢に入れられたが、
主の天使が現れて彼らを外に
出した。そして命じた。

「行って神殿の境内に立ち、
この命の言葉を残らず民衆に
告げなさい」と言った。(使
徒言行録5の20)

この命の言葉とは、聖霊をう
けて語り始めた内容であるし、
この個所のすぐあとにもみら
れる。

それは、キリストが人々の罪

術的な深い世界が、魂の清め、
救いへの道でいかに重要であ
るかなどの霊的直感がちりば
められている。

「さらに、神との深い霊的な交
わりの世界も描かれ、ダンテ
自身の経験からくる描写と考
えられる。

こころした深く広大な世界であ
る神曲において、地獄辺、煉
獄編やそのあとに続く天国編
でも、最後に「星」という言
葉で終えるようにダンテが構
想したのは何故だったろう。

それは、神は最終的には、そ
の愛をもつて人類を歴史を通
して導こうとしておられるの
を、彼自身の現実の体験から
も深く啓示を受けたからであ
る。

清い永遠の光がだんだん見え
なくなっていく―そうした人
生がいかに多いことであらう。
それは大きな波に呑み込まれ
るごとくである。

しかし、詩篇23篇にあるよ
うに、たしかなる羊飼いたる
神、キリストに導かれるとき

により殺されたこと、しかし復活して神の右に座して神と同じであることを示され、それゆえに、人々の罪を赦すことができのだということである。

言い換えると、十字架と復活— それこそは、命の言葉の中心にある言葉であり、そこからあらゆる良きことがあふれ出ていったのであった。

この命の言葉は、すでに旧約聖書のときから、部分的にせよ告げられていた。モーセが受けたのもそうした言葉だった。最初の殉教者であるステファノは、モーセは、シナイ山で、命の言葉を受け、わたしたちに伝えてくれた、と語っている。(使徒言行録7の38) 聖書全体が、広い意味において命の言葉の集大成なのである。

この世には、テレビ、新聞、雑誌、インターネット：等々、ありとあらゆる言葉が発せられている。

しかし、そうした泡のように消えていく言葉でなく、数千年を経ても変ることのなき、命の言葉がある。

ペテロはイエスに次のように言った。

：シモン・ペトロが答えた。

「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。」

あなたこそは永遠の命の言葉を持っておられます。(ヨハネ6の68)

私たちもまた、同じように、キリストこそ、永遠の命の言葉を持っておられる御方だと信じて、ほかの何者にも魂の深いところにおいて従ってはいかないようでありたい。

休憩室

明けの明星

現在、東の空に早朝まだ、

暗い午前5時〜6時ころには、

明けの明星として古来有名な金星が輝いています。そして

木星も強い輝きを金星と並んで見せています。いずれも一般の星々よりはるかに明る

星なので、それらが二つ並んで輝いているのは、いましばらくの間です。このような位置関係にある二つは今後、長い間見られないと思われ

ます。そして、金星と北の空に見える北斗七星の間の高い空には、橙色で強い光のアークトゥルスも見えています。

毎朝、明けの明星を見ては、黙示録に記されているように、再臨のイエスのことを思い浮かべていると言われる方もいます。

以前の「野の花」文集を調べていたとき、いまは召されたU・Mさんが書いているのに出会いました。

「明けの明星を見上げて」

十月十八日午前五時、肌寒いので、上着を肩に掛けそつと、

外に出てみました。未だ、夜明け前の空は、暗く、小さな星々がはるか遠くに見えました。その星々を守るかのように、大きな星が燦然と輝いておりました。

「あつ金星だ！」この八十七年間も生きてきて、初めて見上げる金星でした。

「いのちの水」十月号の明けの明星の記事を読みまして、今夜こそ折っておりました。

「わたしイエスは輝く明けの明星である。」とイエス様が仰せになったとヨハネ黙示録に書かれています。すると、周りの小さな星々は、天に昇られたキリスト者の方々でしょうか。

そしていつか、私も、あの小さな星々のようにイエス様のおそばに行けるのかしら。ふつうは、身体が弱り、孤独になることが多い「老い」も、私にとってには孤独ではありません。あの小さな星々の所に行ける日か近づきつつあるの

ですから。

強い感激のひとつときでした。

(2008年1月発行「野の花」)

○87歳になるまで、明けの明星を見たことがなかったとのことですが、私の周囲にも、明けの明星としての金星は見たことがないと言われる方々は多くいます。

これだけ世界に情報が氾濫しているにもかかわらず、あのすばらしい暗夜にかがやく明けの明星としての金星をだれも、見るようにすすめなかったのだと思われたことです。

よく似たことが、キリストに關しても言えます。老年になってもなお、キリストの光を見たことがない—といわれる方々が日本には圧倒的に多いのは、本当に残念なことです。

キリストの光—それは目には見えないけれども、私たちが死んでも輝きを止めないし、信じるだけで私たちは、その光のただなかへと導かれていくことを知っていたら、いと願うものです。

旧約聖書続編から

旧約聖書の続編は、一般のプロテスタントのキリスト者には、従来ほとんど顧みられてこなかった。

しかし、二千年ほども昔から伝えられてきた聖書に準ずる書であるゆえに、深い内容を持ったものも多くある。

新聞や雑誌、その他のニュースなどに多大の時間をさくよりは、続編に親しむことがより霊的な収穫が与えられる。ここではその一部を紹介する。

○すべてに心を配る神はあなた以外にはおられない。

あなたは、万物を支配することによって、すべてをいとおしむ方となられる。(知恵の書12の13、16)

・私たちのあらゆる心の動き、悲しみや苦しみ、そして喜び、あるいは傲慢や不正な思い：等々いっさいにわたって見通しておられる。しかも、

本当に神に向かって祈り、たすけを求めていくものには、神の愛のお心によって、とき至れば救いをあたえてくださる。

神の全能は、無慈悲な力を振るうのではなく、愛によってその全能を表してくださる。

さらに、自然の世界においても神は心を配り、野草や動物たちのすべてにも心配っておられる。そのような神は、確かに、聖書で記されている全能か、愛の神以外にはない。

○主よ、彼らを癒したのは、

薬草や塗り薬ではなく、すべてをいやすあなたの言葉であった。(同16の12)

人を養うのは、もろもろの収穫物でなく、信じる人を守るあなたの言葉である。(同16の26)

・薬や医学は私たちのからだの病気を癒すことに大きなはたらきをしてくれる。私自身もその恩恵を忘れることはで

きない。

しかし、魂にかかわる病気は、そうした医学によっても薬によってもいやされなかった。ここに記されているように、たしかに、永遠の神の言葉によっていやされるのを実感してきた。

私たちが生きていくために、収穫物は不可欠であることはいうまでもない。しかし、主イエスの言葉にあるように、人はパンだけでは生きることができない。神の言葉によって生きる。

そのことが、ここにある聖句によって暗示されている。

○誠実な友は、命を保つ妙薬。主をおそれる者は、そのような友を見いだす。(シラ書6の16)

・たしかに、神を信じ、キリストを信じるようになって、主をおそれることを知らされ、真実な友が与えられてきたことを知らされる。

お知らせ

○2月の吉村孝雄による県外の聖書講話

・阪神エクレシア：2月10日 午前10時～12時

場所：兵庫県私学会館

神戸市中央区北長狭通4丁目3

-13 TEL (078) 331-6623

JR元町駅東口から徒歩5分

- ・高槻聖書キリスト集会場
- ・14時～16時
- 大阪府高槻市

○問い合わせ **078-578-1876**

- ・阪神エクレシア (川端)
- ・高槻聖書キリスト集会 (那須)

0726-93-7174

○森 祐理コンサート

・日時：3月23日(土)

開演14時(開場13時30分)

・会場：ホテルサンシャイン 徳島アネックス

徳島市南出来島町216)徳島駅

から高徳線路沿に歩いて約7百。徒歩10数分。

森 祐理 プロフィール

京都市立芸術大学音楽学部声

楽専修卒。NHK京都放送局を経て、NHK教育TV

「ゆかいなコンサート」歌の

お姉さんを務める。現在は福音歌手として世界中を飛び回

り、心に響く美しい歌声で、

世代を超えて多くの方々へ希望のメッセージを届けている。

2002年大阪矯正管区長賞、

2007年法務大臣顕彰を拝受。 阪神大震災で弟を失う

体験を通し、以来国内外の被災地にて心の救援物資を運ぶ働きを継続。神戸市追悼式典にて独唱(2010年より6

年連続)。東日本大震災被災地での支援コンサートは、130

回を数える。

ラジオ関西(58KHz：毎週木曜

夜9時30分～)「モリユリの

こころのメロデー」パーソナ

リティ。日本国際飢餓対策機

構親善大使。茨木ロータリー

クラブ名誉会員。CD22枚、

著書「希望の歌と旅をして」

等4冊、トラクト、DVD7枚等

好評発売中。 公式HP

http://www.moriyuri.com

○コンサートの前に、徳島聖書キリスト集会代表の吉村孝雄による聖書からの短いメッ

セージと集会員による手話讃美があります。

・場無料、手話通訳あり会場は定員二百名程度

・無料駐車場あり。

・主催：徳島聖書キリスト集

会問い合わせ

090137841-277(中川)

徳島聖書キリスト集会案内

・場所は、徳島市南田宮一丁目一の

47 徳島市バス東田宮下車徒歩四分。

(一)主日礼拝 毎日曜午前10時30

分(二)夕拝 第一火曜と第3火曜。夜7時30分から。毎月第四火曜日の夕拝は移動夕拝。(場所は、

徳島市国府町のいのちのさと作業所、

吉野川市鴨島町の中川宅、板野郡藍住町の奥住宅、徳島市城南町の熊井

宅の4箇所を毎月場所を変えて開催

です。

・水曜集会：第二水曜日午後一時から集会場にて。・北島集会：板野郡

北島町の戸川宅(第2、第4月曜日

午後一時より。北島夕拝は第二水曜

日夜七時三十分より)・天室堂集会

：徳島市応神町の天室堂はり治療院

(網野宅)、毎月第2金曜日午後8

著者・発行人 吉村孝雄 〒七七三〇一五 小松島市中田町字西山九一の一四 携帯 080-6284-3712 電話・FAX 0885-32-3017 E-mail: emuna@ace.ocn.ne.jp
「いのちの水」協力費 一年 五百円(自由協力費) 郵便振替口座 〇一六三〇一五―五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集会 協力費は、郵便振替口座か定額小為替、または普通為替、または200円以下の切手でも可です。(これらは、いずれも郵便局で扱っています。) E-mail: emuna@ace.ocn.ne.jp